



Title	初級中国語作文授業の実践研究
Author(s)	楊, 彩虹
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 29, 135-143
Issue Date	2022-03
DOI	10.14943/J.HighEdu.29.135
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84359
Type	bulletin (article)
File Information	HighEdu_29_135.pdf



[Instructions for use](#)

A Practical Study of an Elementary Chinese Composition

Caihong Yang*

Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University

初級中国語作文授業の実践研究

楊 彩虹**

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

Abstract — This is a practical study of an elementary Chinese composition class conducted online in 2020. Regular classes were taught in the first half of the semester, and a Flipped Class was implemented in the second half. The students made posters, and communicated with Chinese students online. In addition, process writing was introduced and the students were required to submit an essay of 200 words in each class. At the end of the semester, a questionnaire survey was carried out among the students and the following conclusions were reached. Positive aspects: 1) the students enjoyed writing essays in Chinese; 2) the students improved their Chinese writing skills; 3) group activities and the revisions by the teacher and the teaching assistants helped their Chinese learning; 4) the number of words for each essay was appropriate; 5) the Flipped Class was better than the regular one. Deficiencies: The revisions among the students. The following skills are listed according to their importance: vocabulary, grammar, structure, content, expression, writing style, and writing according to the notation rules.

(Accepted on 20 January 2022)

1. はじめに

外国語学習の四技能の中で、「書く」ことは重要なアウトプットである。国内外の中国語作文教育は他の技能と比べると研究が遅れているものの、近年徐々に注目を集めている。しかし、日本語母語話者を対象とした作文教育に関する研究は依然として不足している。本稿は、中国語作文の教授法、教室活動、フィードバックに関する実践研究である。筆者

が2020年度にオンラインで実施した「文章を書く」初級中国語作文授業および実施したアンケート結果について報告を行う。

2. 先行研究

興水(2005)によると、「ライティングとは、自分の考えや知っていることを書きことばで書きとめ他

*) Correspondence: Research Faculty of Media and Communication, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan
E-mail: yang@imc.hokudai.ac.jp

***) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

人に伝える技能をいう」とあり、日文中訳はライティングには当たらない。また、興水（2005）は日本の中国語専攻の作文授業について、「実際には日文中訳の授業であろう。これは一般的に文法事項の定着をはかり、慣用文型や慣用表現が運用できるようにする授業で、むしろ文法を実践的に説く授業と考えた方がわかりやすい」と述べ、第二外国語の授業においてもライティングは行われていないと指摘している。

罗青松（2011）は、教育環境により作文授業の実施方法は異なるが、作文授業では段落を書くことが教育のスタートラインであり、同時にその中心でもあるということについては共通理解が得られていると述べている。

このように、日本における中国語作文教育の実情は、一般的な中国語教育における作文教育の目標とは異なっている。

教授法については、「プロセスライティング」は近年注目されている作文指導法である。罗青松（2002）は Silva（1997）の論述を次のようにまとめている。「『プロセスライティング』(The Process Approach) は第一言語の作文教育で広く使われる手法で、作文は考えを表すプロセスだという原則を基本とする。『考え』と『表現』は作文教育全体を貫く中心的な概念である。『プロセスライティング』は、学習者の思考と表現力に働きかけ、積極的、示唆的、励みとなる学習、議論の環境を提供することを重視する。学習者は十分な時間を与えられ、教師の指導と助けによって、共に作文のプロセスを進め、言語運用能力を高める。教師の役割は、学習者が話題を見つけ、内容を組み立て、資料を収集し、作文の構成を練るプロセスを助けることである。初稿から、修正、編集などの全プロセスに関わり、学習者を導くが、学習者に過度な干渉はしない。それにより、作文は複雑で創造的な活動になる。作者、すなわち学習者は教育の中心であり、彼ら自身が気づきを得て、それを表現する。読者が注目するのは文章の内容と見解であり、言語形式だけではない」¹

また、コミュニケーション・アプローチは1960年代末から1970年代初頭にかけて外国語教育において注目され、作文の領域においても応用されている。例えば、「部屋を紹介する」という課題において本ア

プローチを用いた場合、「あなたは英語圏の文通相手に手紙を書くつもりです。自分の部屋について説明しようとしています。その人に手紙を書いて、自分の部屋を紹介してください。自分の部屋が気に入っているの、好きなところをどんどんアピールしてください」(Raimes 1983)となる。罗青松（2002）は、会話とリスニングに比べ、作文教育においてコミュニケーション・アプローチの導入は遅れており、その理由として言葉でコミュニケーションを取る際に、一番よく用いられる最も直接的な方法は「聞く」、「話す」であり、作文のように文書を通してコミュニケーションを取ることは間接的な方法であることを挙げている。

日本における中国語作文教育、作文授業、作文教材の研究のほとんどが「日文中訳」や初歩的な授業報告、教師の内省に関するものだったが、羅小東（2006）はプロセスライティングを取り入れた作文授業の実践報告をした。

フィードバックについては、以下の研究がある。莫丹（2018）は、中国において中級レベルの留学生のフィードバックに関する実証研究を行なった。その結果、「教師によるフィードバック」は学習者の信頼を得ており、「学習者同士のフィードバック」は「作者—読者／評価者—作者」という役割の交換を行うことで、学習者の注目を言語の正確性から作文の質に関わる要素へと転換させることができ、さらに「読者／評価者」という立場で他の学習者の作文を評価することで、自身の作文を客観的に評価し、作文能力を向上させることができた。「教師+学習者同士のフィードバック」は両者の長所を兼ね備えており、最も有効的な方法であることが指摘されている。また、「学習者同士のフィードバック」に関しては、中級以上の学習者が適しているとしている。

張恒悦（2020）は、日本の中国語専攻の学習者に対し意識調査を行ったが、その結果、学習者に対する教師のフィードバックの有効性が認められ、学習者はそのフィードバックを中国語表現力の向上に広く活用していることがわかった。さらに、以下のような調査結果も報告されている。

(1) 学習者がフィードバックに対し最も期待するのは文法と語彙であるが、文章の構成や主張に関する指摘への期待度も高い。

- (2) 文章と口頭でのフィードバックはいずれも効果的であり、それぞれ異なる学習戦略に対応している。
- (3) 学習者は自分自身だけでなく、他の学習者の誤用やフィードバックにも興味を持っている。
- (4) 学習者は作文能力の向上はスピーキング能力の向上に役立つと考えている。

3. 中国語作文授業について

本章では、筆者が担当した中国語の作文授業とその実施結果について紹介し、合わせてアンケート調査の結果についても報告する。

3.1 授業の概要

実施方法とシラバス

本稿で報告する授業は、北海道大学 2020 年度秋学期開講の「中国語演習 C2：中国語ライティング」という第二外国語の選択科目である。学習者の学習歴は 6 か月で、週に 2 回の必修科目「中国語 II」を同時に受講している。受講者は 24 名である。

授業は全 15 回で、すべて Zoom 会議システムを利用し、オンラインで実施した。資料の配布や課題の提出、学習者への連絡などは、学内システム ELMS の Moodle を使用した。以下の表 1 は本授業のシラバスである。

表 1. 中国語ライティングシラバス

第 1 回	ガイダンス、自己紹介
第 2 回	第 1 課 自己紹介
第 3 回	第 2 課 ポスターを作る
第 4 回	第 3 課 私の親友
第 5 回	第 4 課 私の得意料理
第 6 回	第 5 課 私たちの大学
第 7 回	
第 8 回	
第 9 回	第 6 課 充実した楽しい一日
第 10 回	第 7 課 アルバイト
第 11 回	第 8 課 私の趣味
第 12 回	第 9 課 私の故郷
第 13 回	第 10 課 先生に推薦状をお願いする手紙
第 14 回	第 11 課 卒業旅行
第 15 回	第 12 課 私の好きな本

授業の流れ

通常授業の流れは以下の通りである。

- (1) 新出語彙、モデル文、関連表現を学習する。
- (2) グループで各自の作文のテーマについて話し合う。
- (3) 20 分間各自で作文を書く。
- (4) 20 分間グループで自身の作文について説明し、学習者同士でフィードバックを行う。
- (5) 各自作文を修正する。
- (6) 学生は作文課題を提出し、教員と TA がフィードバックを行う。
- (7) 学習者は作文を再修正する。

(1)～(4) は授業中に行い、(5)～(7) は授業外で行った。授業の前日までに教材の PDF を Moodle にて公開し、授業中は、新出語彙、関連表現および作文のモデル文を教えた。(1) でモデル文を教える際は、文型や表現を説明した上で、学習者を一人ずつ指名し、文を読ませ、翻訳させた。(4) では、ブレイクアウトセッションを行い、3～5 名を 1 つのグループとし、グループ内で自身の作文について紹介した後に、互いにそれぞれの作文について添削をさせた。その間、教員は各グループを巡回し、学習者の質問に回答する、サポートが必要なグループに対しアドバイスをするといった指導を行った。

その後、学習者は 1 週間以内に Moodle にて 200 字程度の課題作文を提出し、教員と中国語ネイティブの TA が添削および良かった点や改善点についてコメントをし、学習者に返却した。学期末には修正した原稿をまとめて再提出させた。

学期の後半では、反転授業を行った。前日までに Moodle においてオンデマンド教材を公開し、授業当日は冒頭 20 分間を録画教材の視聴時間とした。オンデマンド教材はテキストの語彙、関連表現、モデル文を解説する録画であり、学習者は事前に予習しても、授業当日冒頭の時間で視聴してもよい。次に、教員は画面共有機能を使って前回学習者に提出してもらった作文の中から数篇を取り上げ、フィードバックを行なった。その後の流れは通常の授業と同様である。

教授法

本授業では、プロセスライティングとコミュニカ

ティブ・アプローチの両方を取り入れた。まずプロセスライティングに関しては、以下の要領で実践を行った。各課で書く作文のテーマについて教員から学習者に対し質問し、教員はその答えをチャット欄に書き、クラス全体で共有した。学習者同士の添削・コメント、および教員と TA の添削・コメントを受けて、学習者はその都度修正を重ね、作文を完成させる。

次にコミュニケーション・アプローチに関しては、以下の「アルバイト」や「手紙・メールを書く」をテーマとした実践において見ることができる。まず「アルバイト」の授業では、バイト先の料理店に中国人観光客が来たという設定の4コマ漫画を見て、短い文章を書く練習をさせた。さらに、作文の課題では、アルバイトをしていない学生の存在を考慮し、「自身が現在行なっているアルバイト、またはこれからしてみたいと考えているアルバイト」について文章を書くように、個々の学習者の実情に即した指示を心がけた。次に「手紙・メールを書く」の授業では、以下の課題の中から一つ選び、作文を書くように指示した。

- (1) 始めに自身の両親や友達に対するメール・手紙を中国語で書き、それを日本語に訳したものを実際に送る。
- (2) 中国人の先生に対するメール・手紙を書く。
- (3) 授業中の交流活動で知り合った中国人学生に対するメール・手紙を書く。

以上のように、本授業では手紙やメールを書く場面設定を具体的に提示し、また複数用意することで、学習者自身に課題を選択させることができ、作文を書くことへのモチベーションが向上するように工夫した。また、授業中、《一封家书》(家族への手紙)という中国語の歌を流し、その歌の URL 情報をクラスで共有した。

協働学習

本授業では、協働学習も盛り込んでいる。「ポスターを作る」の授業では、学生はグループでポスターを作成し、そのポスターについて発表を行った。また「私たちの大学」の授業では、受講生は中国の大学生と3回に渡って交流活動を行い、最終回にはグループごとに自身の大学について発表を行った。発

表では、大学の好きな場所、食堂や寮などが紹介された。学習者からは、「中国のネイティブの方とお話をするのができてよかった」、「中国の文化についてより興味を抱くことができた」、「中国の大学事情について身近なテーマで発見があった」、「日本の学生と中国の学生がお互いに添削しあったことが良かった」といった肯定的な感想が多く寄せられた。

フィードバック

本授業では、前掲の莫丹(2018)において最も効果的とされる「教師+学習者同士のフィードバック」を採用した。

教師のフィードバックでは、受講生24名分の作文を添削するために、教員で1時間程度、TAに至っては2時間程度の時間を要した。

また、学習者同士のフィードバックでは、活発に話し合うグループと各自自身の作文を読むだけにとどまったグループが見られた。

3.2 実践結果

作文を書く時は、学習者はわからない単語や表現について調べることができるため、学習者が第二外国語を学習して1年目にしては学習した語彙や文法を使って非常に豊かな表現を作ることができているという印象を受けた。また、教員は作文の添削を通して学習者一人ひとりについてよく知ることができ、学生との深い交流ができたように感じた。以下の作文は、学習者Aさんが最終回の授業で提出した「好きな作品」について紹介する添削前の作文である²⁾。

我最喜欢的电视剧是《リーガル・ハイ》, 它的汉语题目是《胜者即是正义》。这是2012年播放的日本电视剧, 以律师和法律为题材的喜剧。

这部电视剧有两个主角。一个是堺雅人扮的古美门研介, 另一个是新垣结衣扮的黛真知子。他们都是在古美门法律事务所一起工作的律师, 不过, 性格正相反。

古美门最喜欢赚钱, 性格也很骄傲自大和令人厌恶。他为了胜利使用什么办法, 实际上在诉讼战无不胜。另一方面, 黛的性格非常正直和公

正，努力打抱不平。她很信以法律会维护“正义”。

因为这么性格的差异，他们常常口角。这是一个搞笑的重点。但是作为律师黛还不成熟，她被古美门驳倒每次。虽然他们一起协力解决很难的案件。通过那个，黛理解了法律的界限，想“正义”是什么，越来越成长。这是最有趣的重点。

小学五年级的时候，我看了这部电视剧。以后我一直想成为律师。下个月我就要移动从综合文科到法律系了，然后应考司法考试。我已经开始了学习法律学，一定继续努力！

私が最も好きなテレビドラマは『リーガル・ハイ』で，その中国語での題名は『胜者即是正义』です。これは2012年に放送された日本のテレビドラマで，弁護士と法律をテーマにしたコメディです。

このテレビドラマには2人の主人公がいます。1人は堺雅人が演じる古美門研介で，もう1人は新垣結衣が演じる黛真知子です。彼らは古美門法律事務所と一緒に働く弁護士ですが，性格は正反対です。

古美門はお金儲けが大好きで，性格も尊大で嫌味です。彼は勝利のためならどんな方法も使い，実際に訴訟において無敗です。一方，黛はとても正直かつ公正で，弱者の味方をしようと努力します。法律で「正義」を守れると強く信じています。

このような性格の違いから，彼らはずっと口論しています。これは笑えるポイントです。しかし弁護士として黛はまだ未熟で，毎回古美門に言い負かされています。それでも彼らは協力して難しい案件を解決します。それを通して，黛は法律の限界を理解し，「正義」について考え，だんだん成長します。これはこのドラマで最も面白いポイントです。

小学校5年生のとき，私はこのテレビドラマを見ました。それから，ずっと弁護士になりたいと思っています。再来月，私は総合文系から法学部に移る予定で，その後司法試験を受験します。私は法律学の勉強を既に始めているので，これからも絶対に努力を続けます！

この作文は，少々間違いがあったものの，語彙と文法のほとんどが正確に使われている。とりわけ，複文がうまく使用されている。また，表現力が豊かで，紹介するドラマのポイントを押さえており，自分自身への影響も合わせて述べられている。

また，以下のaは学習者Bさんが提出した第2回の授業の課題「自己紹介」の一文である。そこでの誤りを訂正するためにbにおいて，中国語の場所詞は動詞の前に来るという内容で添削を行った。それを受け，その後の第9回の授業の課題「私の一日」の作文では，cのように正しい語順「介詞+場所+動詞+目的語」に修正されていた。

- a. *我很想上课在北海道大学校园内。
(私は授業を受けたいです，北海道大学キャンパス内で³。)
- b. 我很想在北海道大学校园内上课。
(私は北海道大学キャンパス内で授業を受けたいです。)
- c. 我一下课就和朋友去玩，然后十二点三十分在食堂吃午饭。
(私は授業が終わったら，すぐに友達と遊びに行きます。その後12:30に食堂で昼ご飯を食べます。)

また，以下のdは学習者のCさんが「自己紹介」の冒頭で書いたものである。語彙と文法の誤用はないものの，同じ構文が続いている。そこで，「同じ構文を避けるともっといい作文になります」という内容でフィードバックを行った。それにより，その次の課題の「憧れの人」をテーマとする作文では，eの文のように，表現がたいへん豊かになった。

- d. 我叫○○○。我是日本人。我是北海道大学的學生。我是法律系的學生。
(私は○○○と言います。私は日本人です。私は北海道大学の學生です。私は法学部の學生です。)
- e. 另一个日本的演員菅田將暉有非常好演技，此外他幽默，時尚，有自己的想法。他和我老家同一個府。所以，我尊重他。
(もう一人の日本の役者である菅田將暉は演技

がとてもいいです。そのほか、彼はユーモアでおしゃれで、自分の考えを持っています。彼と私の実家は同じ府です。なので、彼を尊敬しています。)

3.3 アンケート調査結果の報告

本報告では、本授業に対する学習者の意識について明らかにするため、アンケート調査を行った。学期末に、学習者を対象に Google form でアンケート調査を実施し、22部を回収した。アンケートは11問で、第1問～第3問、第5問、第7問～第9問は五肢択一、第6問は三肢択一で、さらに理由を記入させた。第4問は提示された項目に順位を付けるもので、第10問、第11問は記述式で記入は任意とした。本節では、アンケート調査の結果について詳細に報告する。

第1問 母語である日本語の作文は得意だと思いますか。

表2. 第1問

	回答数	割合
とてもそう思う	3	14%
ややそう思う	9	41%
どちらとも言えない	5	23%
あまりそう思わない	4	18%
まったく思わない	1	4%

半数以上の学習者が母語である日本語の作文が得意だと回答してはいるものの、それほど多くはないようである。

第2問 中国語で作文を書くのは楽しかったですか。

表3. 第2問

	回答数	割合
とてもそう思う	3	14%
ややそう思う	15	68%
どちらとも言えない	3	14%
あまりそう思わない	0	0%
まったく思わない	1	4%

作文の授業では、受講者が黙々と作文を書き、会話の授業ほど活発な雰囲気はないと思われるかもしれない。しかし、この設問に対して「とてもそう思

う」と「ややそう思う」を選択した学習者は全体の82%も占めており、受講生の大部分が中国語で作文を書くことに対し楽しかったという感想を抱いていることがわかった。コミュニケーション・アプローチを取り入れたことで、このような結果に繋がったと考えられる。

第3問 この授業を通して、中国語作文能力が向上したと思いますか。

表4. 第3問

	回答数	割合
とてもそう思う	10	45%
ややそう思う	12	55%
どちらとも言えない	0	0%
あまりそう思わない	0	0%
まったく思わない	0	0%

程度の違いはあるが、すべての学習者がこの授業を通して中国語の作文能力の向上を実感している。前掲の3.2で挙げた作文からも学習者の成長が見られたため、本授業の「中国語で文章を書く能力の向上」という学習目標が達成できたと言えるだろう。

第4問 中国語で作文を書く際に重要だと思う順に、下記の7つの項目に順位を付けてください。

この設問では、中国語で作文を書く際に、学習者が重要だと思う項目の順番について尋ねている。これらの項目は授業中指導した内容である。前述のように、現在の日本で実施されている作文授業の多くが文法を重視した「文を作る」授業である。本設問は、学習者は作文をする際に文法のみで十分であると感じているのか、学習者は設問中にある項目の中でどれを重要であると認識しているのか、について確認するためのものである。アンケートでは並べ替えになっているが、集計の際には図1のように、1位に7点を付け、順位が1つ下がるにつれ1点下がるように数値化を行なった。

その結果、「語彙力」と「文法力」は同点の1位となり、学習者はそれらを同程度に最も重要であると認識している。その他は、3位から順に「文章構成力」、「内容」、「表現力」、「適切な文体で書ける」、「表記ルールに沿って書ける」となっている。学習者は

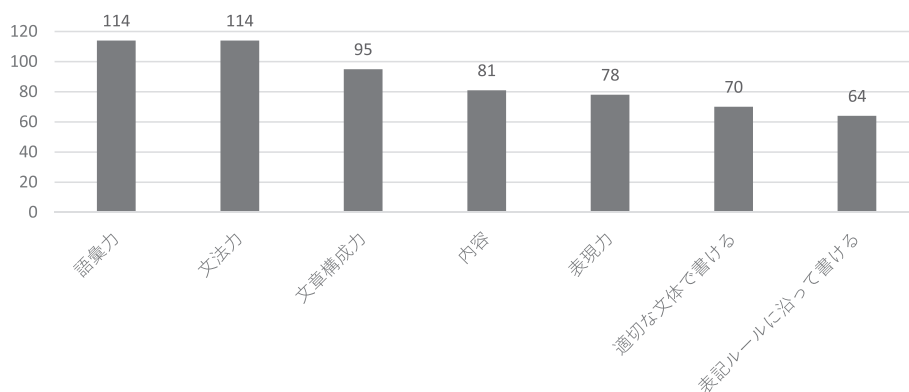


図1. 第4問

語彙と文法を最も重要であると回答しているが、他の項目も重視していることがわかる。この結果は、張恒悦 (2020) による調査結果とも類似している。従来の日文中訳を行う作文授業では、「語彙力」と「文法力」しか伸ばすことができないため、文章を書くためには不十分であることがわかる。

第5問 適切だと思う作文課題の文字数は何文字ですか。

表5. 第5問

文字数	回答数	割合
400字以上	1	4%
300字程度	1	5%
200字程度	17	77%
150字程度	3	14%
100字以下	0	0%

従来の教材や先行研究には、初級段階における作文課題の適切な文字数に関して参考にできるものがなかったため、本授業では毎回200字の作文課題を課すことにした。作文課題の字数が多すぎると学習者の負担となり、一方少なすぎると書きたいことを十分に述べるができない。本設問は、初級学習者が作文をする際の適切な文字数について調べるために設けた。調査結果からは、77%の学習者が本授業で課した200字という字数に対し妥当であるとの回答を示した。

第6問 授業中に教科書の内容を勉強する通常の授業とオンデマンド教材で事前に学習する反転授業のどちらがよかったですか。また、その理由を書いてください。

表6. 第6問

回答	回答数	割合
通常の授業	8	36%
どちらとも言えない	2	9%
反転授業	12	55%

半数以上の学習者が反転授業を選択し、その理由について、「自分のペース、タイミングで学習ができる」、「質問、話し合い、フィードバックに時間を割けるから」を挙げていた。その一方で、36%の学習者は通常の授業を好み、その理由を「学習の負担」、「通常の授業は読む練習ができる」としていた。本調査の結果は、通常の授業よりも反転授業の方が学習者からの評価が高い傾向を示した。今後は、反転授業を実施する際に、オンデマンド教材のメリットを活かしつつ、デメリットをできる限り少なくする工夫が必要である。

第7問 ほかの学生と一緒に原稿を作ったり、発表したりすることは作文の学習に役立ちましたか。

表7. 第7問

回答	回答数	割合
とてもそう思う	8	36%
ややそう思う	9	41%
どちらとも言えない	5	23%
あまりそう思わない	0	0%
まったく思わない	0	0%

「とてもそう思う」と「ややそう思う」を選択した人を合わせると全体の77%を占めており、協働学習は作文の学習に一定程度の効果があったと言えるだろう。

第8問 教員とTAの添削は作文の学習に役立ちましたか。

表8. 第8問

	回答数	割合
とてもそう思う	11	50%
ややそう思う	9	41%
どちらとも言えない	2	9%
あまりそう思わない	0	0%
まったく思わない	0	0%

第9問 グループで作文をチェックしあうことは作文の学習に役立ちましたか。

表9. 第9問

	回答数	割合
とてもそう思う	4	18%
ややそう思う	7	32%
どちらとも言えない	7	32%
あまりそう思わない	4	18%
まったく思わない	0	0%

教員とTAの添削が作文の学習に役立ったという回答は91%にも上り、グループでの添削が役立ったという回答の50%よりも41%高い結果となった。教員とTAの添削は学習者同士の添削より評価が高かった。

第10問 授業の良かったと思う点について書いてください。

第11問 授業の改善した方が良いと思う点について書いてください。

上記2つの設問も記述式で任意回答とした。良かった点については、17件の回答が得られた。その主な内容は、「グループワーク、学生同士の添削や交流活動」(4件)、「教員とTAによる添削」(3件)、「課題が適切であった」(3件)であった。

教員とTAの添削に関しては、「提出した課題の添削をいただけたため、新しい表現や正しい文法の理解に役立ちました」、「途中からの教員からフィードバックをもらいながら作文を書く形式は作文能力向上に役立った」といった回答が得られた。

一方、改善すべき点の回答としては5件の回答があった。その内の4件が「学生同士の添削」に関す

るものだった。「他人のミスに気付いて修正できるほど中国語に精通していない」、「項目を設けるなどもう少し具体化した方が話しやすい」、「グループワークの時間が長く感じた」といった意見があった。他人のミスを指摘するためには他者の書いた文章を理解する能力や正確な文法に関する知識が必要となる。しかし、初級段階の学習者にはそうした能力はまだ十分に身につけておらず、それにより他人のミスを指摘することに困難を感じたと考えられる。前掲の莫丹(2018)においても、「学習者同士のフィードバック」は中級以上の学習者が適しているとの指摘がある。しかしその一方で、中国人学生との交流活動において、日本人学習者は中国人学生の書いた日本語の原稿におけるミスを修正していなかったという場面も散見された。このことから、もともと日本人学習者にとって他人のミスを指摘すること自体が心理的なハードルとなっている可能性がある。この点については、今後さらなる考察が必要である。また、学習者同士のフィードバックでは、単純な語彙、文法、句読点のミスの訂正に加え、構成や内容の指摘も非常に重要であり、さらに読者と作者の視点の転換は重要な目的の一つとなっている。したがって、初級レベルの学習者同士による添削にはメリットがある一方で課題もあるため、学習者同士のフィードバックの内容を工夫し、時間を柔軟にするなどの改善策を検討する必要がある。

全体的には、本授業は学習者から良い評価を得ることができた。中でも、作文の授業が楽しかったという感想が多く寄せられた。本授業を通して、学習者が中国語作文の能力を向上させるという本授業の目的が達成できたと言える。そのほかにも、授業中に行われた協働学習、教員とTAによる添削に対する評価が高く、適切な作文の長さは200字であるとの意見が得られた。さらに、通常の授業より反転授業の方が良いという意見が多く寄せられ、学習者は文法や語彙のほかに、文章の構成や表現力なども重要であると認識していることがわかった。最後に、学生同士の添削については、良かったとする意見がある一方、今後改善すべき問題点も残った。

4. おわりに

本稿では、初級中国語作文授業についての実践報告を行なった。学期の前半は通常の授業を行い、後半は反転授業を試みた。また、プロセスライティングとコミュニケーション・アプローチを導入し、授業中学習者同士で作文を添削させ、各課 200 字の作文を提出させた。その後、教員と TA で学習者が提出した作文を添削し、評価した。学期中は、グループでポスターを作成する、中国の大学生とオンラインで交流活動を行うなど、さまざまな教室活動を取り入れた。

学習者のアンケート結果では、以下のことが明らかとなった。

【授業の良かった点】

- 1) 中国語で作文を書くのが楽しかった。
- 2) 中国語の作文能力が向上した。
- 3) グループ活動、教員と TA による添削が学習に役立った。
- 4) 作文の文字数が適切であった。
- 5) 反転授業は通常の授業より良かった。

【改善点】

- 1) 学習者同士の添削。

また、学習者が中国語で作文を書く上で必要な力を重要度が高いと認識している順に挙げると、以下のようなになる。

- 1) 語彙力
- 2) 文法力
- 3) 文章構成力
- 4) 内容
- 5) 表現力
- 6) 適切な文体で書くことができる
- 7) 表記ルールに沿って書くことができる

「語彙力」と「文法力」については同程度に重要であると認識されている。

今後は、学習者同士のフィードバック、学習者の作文能力を向上させる要因についてさらに研究を深めていきたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、査読者、編集委員会の先生方からたいへん有益なご意見をいただきました。心より感謝申し上げます。

注

- 1 日本語訳は筆者による。以下も同様。
- 2 日本語訳は学習者本人が書き、作文と一緒に提出したものである。
- 3 日本語訳は筆者による。以下も同様。

文献

- 興水優 (2005), 『中国語の教え方・学び方: 中国語科教育法概説』, 富山房インターナショナル
- 張恒悦 (2020), 「关于汉语中级作文指导的修正反馈研究: 从学习者视角出发」, 『外国語教育のフロンティア』, 3, 1-10
- 羅小東 (2006), 「试论中国語的写作教学」, 『語学教育研究論叢』, 23, 49-60
- 罗青松 (2002), 《对外汉语写作教学研究》, 中国社会科学出版社, 北京
- 罗青松 (2011), 对外汉语写作教学研究述评, 《语言教学与研究》, 2011 年第 3 期, 29-36, 北京
- 莫丹 (2018), 基于反馈的留学生汉语多稿写作教学行动研究, 《语言教学与研究》, 2018 年第 5 期, 13-23, 北京
- Raimes, A. (1983), *Techniques in Teaching Writing*. New York: Oxford University Press
- Silva, T. (1997), *Second language composition instruction: developments, issues, and directions in ESL in* Kroll, B. ed., *Second Language Writing: Research Insights for the Classroom*. New York: Cambridge University Press, 11-23